



Die preussische expedition nach Ost-Asien
4 Bde. Berlin, 1864. (初版・本学図書館所蔵)

により『オイレンブルク日本遠征記』として翻訳されている。)は、幕府との交渉の過程に沿って記されています。この中には、交渉担当者として重庄に耐えかねたと思われる堀織部正利熙の突然の切腹や、ハリス・アメリカ公使の要求で、暗殺されたヒュースケンの家族へ 1 万ドルの賠償金を支払ったことなど、幕府が交渉の過程で秘めていた事実も記載されています。

条約締結については、幕府側の国家連合体への理解が得られない中、オイレンブルクがプロイセン単独ならば締結できると予測する条約を 5 年のうちに他の諸邦にも通用させていくことを幕府に提案し、拒否された事実を明らかにしています。そして、その結果としてプロイセン一国との締結で終わったことに対する考え方、殊に条約を締結できなかったドイツ諸邦のために、今後プロイセンが後盾として重責を担っていかなければならないことなどが述べられています。

また、「後記」として条約締結直後の日本国内の政治情勢も書かれており、1862 (文久 2) 年に起きた坂下門外の変で、条約の調印者であった安藤対馬守正信が攘夷派に襲われ瀕死の重症を負ったことなど、オイレンブルクの予測を超えた日本国内の変化が説明されています。

この交渉について、ザクセンの商工業団体から代表団に参加したグスタフ・シュピース (Gustav Spies) は、条約締結が成らなかった非プロイセンの立場から「オイレンブルク伯は、長い間反対したのではあつたが……日本政府は、一歩も譲らなかつたし、また吾々も此の要求を執拗に主張したならば、全く尾を捲いて、退却しなければならなかつた」⁽³⁾と交渉が厳しいものであったことを振り返っています。そして、シュピ

ースは今後、関税同盟とドイツ諸邦の組織が変えられない限り、外国に向かって総体的な利益を代表することは難しいとの見解を示しています。

帰国後のオイレンブルクとドイツ統一

オイレンブルクが帰国した頃のプロイセン国内では、1862 年にヴィルヘルム一世の信任を得たオットー・ビスマルクが首相兼外相に就任しました。オイレンブルクは東アジア遠征の成果が評価され、内務大臣として入閣しました。ビスマルクは 1866 年にオーストリアとの普墺戦争で勝利すると、翌 1867 年には北ドイツ連邦を結成してハンザ諸都市を併合しました。シュピースの言う「組織の変化」が起きたのです。これに応じて徳川幕府は、同年、北ドイツ連邦旗を掲げた船舶にプロイセンに保証したと同様の権利を与えたことから、オイレンブルクが果たせなかつた条約締結問題が一挙に解決したのです。

また、日本では 1868 (慶応 4) 年に徳川幕府が崩壊し、翌 1869 (明治 2) 年に明治政府と北ドイツ連邦ならびに関税・通商同盟諸国との間で修好通商航海条約が締結されました。

さらに、1874 年には普仏戦争でプロイセンが勝利した結果、ドイツの統一が実現しました。オイレンブルクは、15 年間にわたり内相としてドイツ統一事業に関与し続け、1878 年にこの職を退任しました。入閣時から彼の直接的な任務ではなくなっていたにしても、内相在任中に日本との条約締結問題が解決した喜びは一入だったのでないでしょうか。

註

- (1) 中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』下巻 (新異国叢書 13) 「解説」362 頁 雄松堂書店、昭和 44 年
- (2) これらの書物で述べられている日本観は、風俗、宗教、政治、経済、芸術、食物、気候などを記述したものが多く、E・ケンペルや F・フォン・シーボルトなど、それまでにオランダ東インド会社の一員として来日したドイツ人の著作による見解と同じように、日本の諸特徴に高い評価を与えています。
- (3) 小澤敏夫訳注『シュピースのプロシャール日本遠征記』333 頁 奥川書房 昭和 9 年

おく まさよし (司書・図書館事務長兼管理運営課長)

今年「日本におけるドイツ年 2005 / 2006」です。

記念稀観書展示会 日本で知られたドイツの世界

昨年、開催した展示会です。目録をご希望の方はお申し出下さい。(残部 30 部です。)